

はじめに

ようこそ 消えつつある身近な昆虫たちの世界へ

私は70年以上にわたり、昆虫の生態観察を続けている「虫屋」です。子どものころに虫に魅せられ、以来、おもに家の近くの公園や緑地をフィールドとして、調査や観察、撮影をしています。ずっとほぼ同じ場所で観察しているのですが、このところ少し気になることが増えてきました。それは、いわゆる普通種と言われる、どこでも見られた昆虫たちが姿を消しつつあることです。

地球上の大変化は、おそろしい事態が地球におおいかぶさるように、科学的根拠のある情報として毎日のように報道されています。

最近の新聞にも「身近なチョウ34種、急減」（朝日新聞2019年11月13日付）と題し、身近な里地、里山にたくさん生息していたと考えられるチョウの仲間87種のうち、国蝶「オオムラサキ」をはじめとする約4割が「絶滅危惧種」レベルまで急激に減少している、そんな調査結果が公表されました。これは、全国の里地や里山約50カ所での2008～2017年の調査結果をまとめ、環境省と日本自然保護協会が発表したものです。

さらに、野生生物の絶滅の危機の度合いを示す国際自然保護連合（IUCN）の「レッドリスト」では、2021年12月に各国の政府や環境団体はその危険度を再考して最新版がまとめられ、世界のトンボの仲間は6016種のうち675種が「絶滅危惧種」に該当すると指定されました。その大きな原因は、トンボ類の好適環境である湿地、沼地、池などが、広く失われたことにあり、トンボの生息環境を守ろう、と呼びかけています。

私の暮らす神奈川県かながわの身近な「地球の豊かなゆりかご」の虫たちも、驚くほど減少しています。

